座長：玉崎　章子
鳥取大学医学部附属病院 小児在宅支援センター

P1-064

PC エゴグラム・SCAT調査からみた、実習終了後の看護学生におけるストレスとの関連

田中 勇気
日本保健医療大学 小児看護学

【目的】
実習後のストレスと看護大学生の特徴との関連を明らかにする
【方法】
1.対象　S県近郊にある私立看護大学4年生を対象とした。回収数は87名（男性30名、女性57名）で、平均年齢21.46歳（SD=2.22歳）であった。2.方法　次の質問紙調査を実施した。1)PC エゴグラム従来のエゴグラムに、自我状態を適切に切り替えることができる透過性調整力（PC）と、自分を見るときの傾向（SR）を加えた、質問紙である。2) SCATSCAT は、アサーティブな態度を確認する尺度であり、4因子、40項目で構成される。3) 職業性ストレス調査票　職業性ストレス簡易調査票は計57項目である。学生用に文言を修正し、実施した。3.分析　IBM SPSS24を用いて、Pearson の相関分析を行った。p値5%未満とした。4. 倫理的配慮 S大学の倫理委員会の承認を得て実施を行った。目的と意義、研究の方法、及び個人情報保護に関する事項、インフォームド・コンセントに関する事項を書面及び口頭にて説明した。参加は任意であり、同意しない場合にも不利益を受けない事、撤回が可能である事など説明し、内容に同意が得られる者には同意書に記入を求めた。
【結果】
1. ストレス反応と PC エゴグラム・SCAT の関連 Pearson の相関分析を行った結果、ストレス反応と有意な相関は得られなかった（n,s)2. ストレス要因・周囲の支援と PC エゴグラム・SCAT の関連　ストレス要因と周囲の支援の得点と PC エゴグラム、SCAT との関連を明らかにするため、Pearson の相関分析を行った。結果、NP・FC・PC、SR、受容性、自己開示が1％水準で有意な負の相関であった。3. ストレス総得点と PC エゴグラム・SCAT の関連ストレス総得点と PC エゴグラム、SCAT との関連を明らかにするために、Pearson の相関分析を行った。結果、PC が5%水準、自己開示が1％水準で有意な負の相関であった。
【考察】
ストレス要因と周囲の支援では、NP・FC・PC、受容性、自己開示が負の相関であった。NP は相手を受容する事、FC は自分の考え、気持ちを表出できる側面が、ストレスを軽減する可能性が推察された。総得点では、PC と、自己開示が負の相関であった事から、PC の高さがストレスを軽減する可能性が示唆された。アサーション・トレーニングにより、PC の得点が高まる（乃美、2003）事から、実習前にトレーニングを行い、気持ちや考えを表出する事や、受容する訓練を行う事で、実習中のストレスを軽減する可能性が示唆された。

P1-065

小児病棟におけるベッドからの転落予防への取り組み

岩田 麻里、渡邊 裕美、富田 恵子
鳥取大学医学部附属病院 小児総合病棟

【はじめに】
対象施設の小児病棟では、小児版の転倒・転落予防マニュアルは整備されておらず、院内のマニュアルに沿って以下の対策を行っていた。
1　入院時、アセスメントシートを用いスクリーニングを実施。
2　1の結果、転倒・転落危険度2以上の場合、看護診断を立案。その後、週1回で家族とともに評価を実施。
3　付き添い家族に対して、転倒・転落リーフレットを用いて柵の使用などについて説明。
4　サークルベッドには、注意喚起のポスターを掲示。
そのなか、入院中の児が転落により頭部外傷を負う事故が発生した。これをきっかけに、小児版のマニュアルを作成し、新たな転倒・転落予防を開始した。
【目的】
これまで実施していた転倒・転落対策と見直し後の対策を比較し、より有効な対策にするためにどのような見直しを行ったのか考察する。
【比較】
事故を受け、院内マニュアルと文献を参考に、小児版のマニュアルを新たに作成し、以下の対策に改善した。
1´1に同じ。
2´1´の結果、転倒・転落危険度2以上の場合と未就学児には看護診断を立案。その後、入院3日目、以降、週1回、家族とともに評価を実施。
3´付き添い家族とともに、作成した転倒・転落チェックポイントリストに沿って、転倒・転落予防の方法について確認を行う。リストを用いた確認は、看護診断と同様、入院3日目、以降、週1回家族とともに実施。
4´転落予防のリーフレット、注意喚起のポスターを新たに作成。
改善した点は、以下の3点。未就学児全員に看護診断を立案。転倒・転落チェックポイントリストを作成。家族と繰り返し予防対策について評価。
【結果】
対象施設の小児病棟では、過去3年間で年間10件前後の転倒・転落事故が起きているが、新しい対策を開始してから現在までに（半年間）、転倒事故発生のみで転落事故は起こっていない。
【考察】
先行研究において、小児の転倒・転落を防止するには家族から理解と協力を得られるような働きかけが必要であり、また、容態が回復し活動性が高まったタイミングで再度家族へ説明する事が効果的になるとされている。新しい対策では、決められたタイミングで繰り返し、家族とチェックポイントリストを用いて振り返る方法を導入した。看護師と家族がともに振り返る事は、お互いに必要性を確認し、転倒・転落予防への意識を維持することにつながる。よって、これまでの対策と比較し、転倒転落予防へ有効であると考察する。

Presented by Medical*Online